

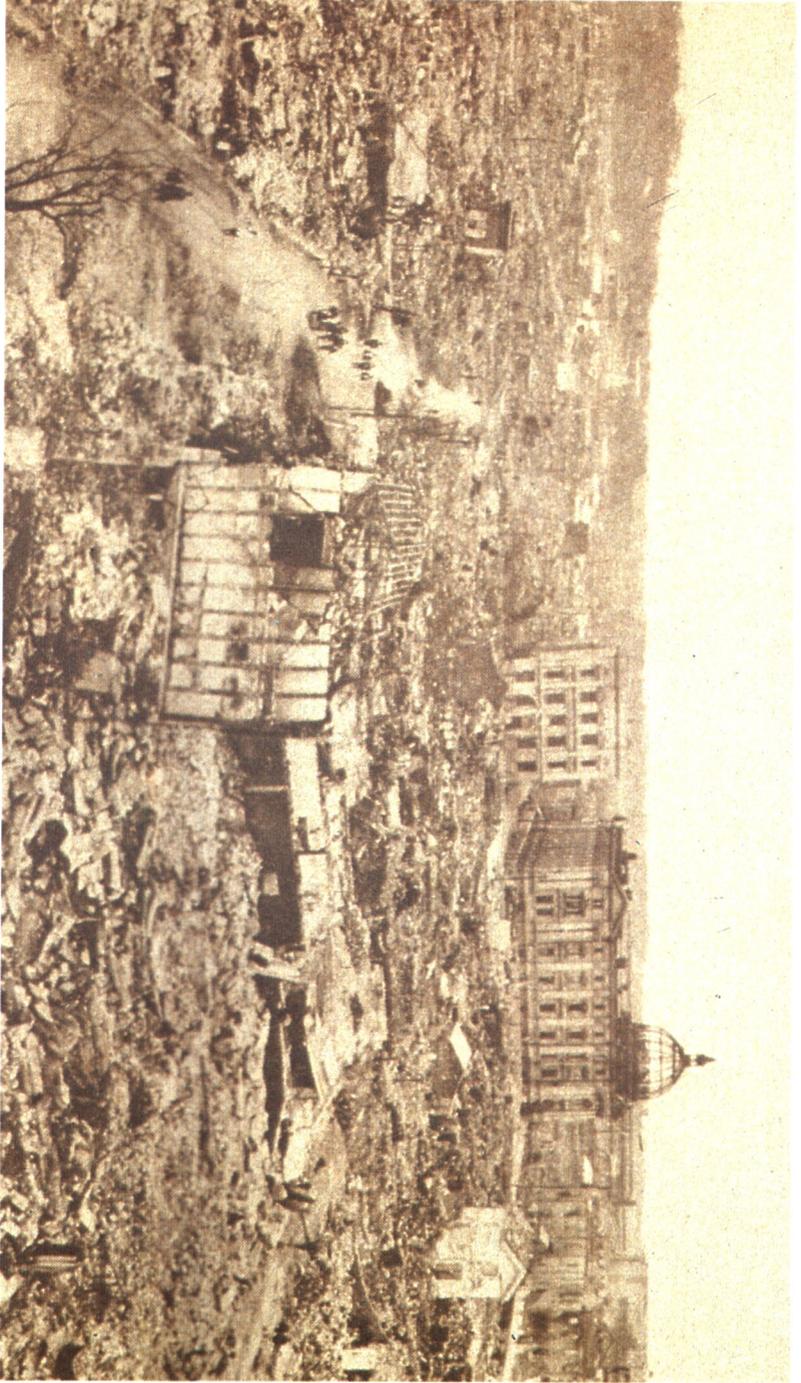
開港当初の横浜を鳥瞰した御開港横浜大絵図

神奈川県立博物館蔵



大磯海岸で海水浴をする歌舞伎役者

大磯町役場蔵



大正12年(1923)関東大震災で焦土と化した横浜市街

『大震災写真真画報』から

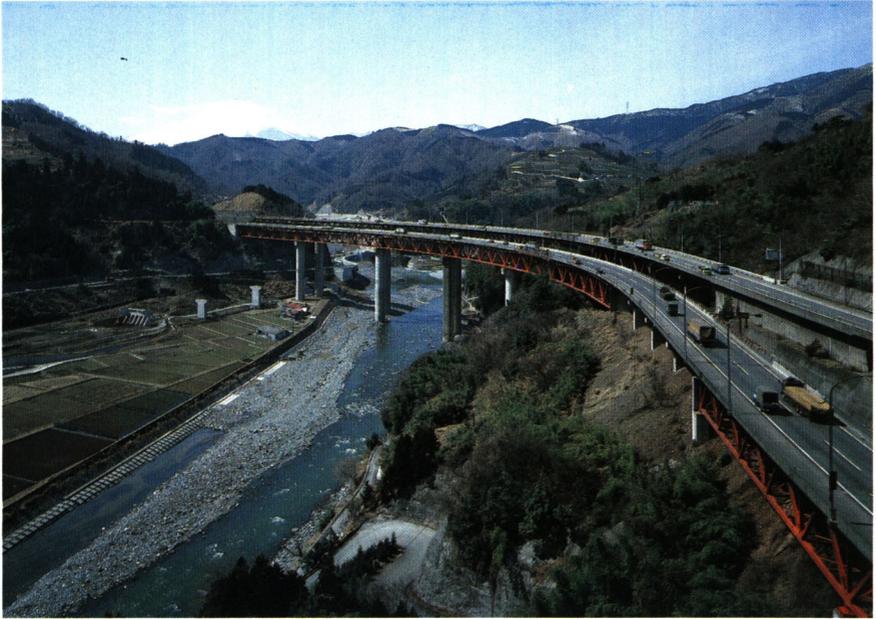


戦災の焼跡を片づける横浜市民(本町4丁目付近)

『マツカーサーの見た焼跡』から



昭和48年(1973)重化学工業地帯の工場群(川崎市川崎区白石町・扇町・南渡田町付近)



酒匂溪谷にかかる東名高速道路



都市化が進む相模野台地(海老名市東部と綾瀬市付近)

神奈川新聞社提供



一大臨海工業地帯へと成長した埋立地

神奈川新聞社提供

序

私たちのこの県域に、人跡が記されてから、およそ三万年になるといわれております。私は、県内のすみずみに足を運んでおりますが、その度に、そこに刻まれている私たちの祖先のすばらしい営みに驚き、そして、これを誇りに感じております。

古代から中世に至る一大変革は、申すまでもなく、相模と武蔵の両国の武士団を中心として、鎌倉を舞台に繰り広げられました。さらにその後、鎖国三百年のねむりからさめて、新しく世界に門戸を開いたのは横浜でした。このような過去を踏まえ、すぐれた伝統を未来へ伝えることは、私たちに課された責務だと考えております。

神奈川県史の編集は、昭和四十二年から手がけ、すでに、通史編・資料編等三十六巻、三十八冊の完成をみています。本巻は、その総集編でもあり、神奈川県三万年の起伏に富んだ歴史を概観したものです。神奈川県史三十八冊とあわせ御利用いただき、神奈川の未来を展望する手がかりにさせていただければ幸いです。

本巻を御執筆いただいた前神奈川県史総括監修者竹内理三氏の御努力と、この編集に御協力をいただいた前神奈川県史主任執筆委員児玉幸多氏・大久保利謙氏・安藤良雄氏に心からお礼申し上げます。

昭和五十九年十二月

神奈川県知事 長洲 一一一

目次

序

はじめに

原始・古代

一 人間の痕跡

(一) 最古の人跡……………三

二万年前の人跡(三) 一万年以上つづいた先土器の時代(六) 土器と弓矢の出現(七) 竪穴住居の時代(九) 集落の発展(一〇)

(二) 日本人の原点……………二

稲と鉄の伝播と弥生文化(二) 定住集落の発生(四)

(三) 毛人国の成立……………一七

集落が小国を形成する(二七)

二 大化の改新と相武

(一) 杖刀人の首……………二〇

杖刀人の首(三〇) 国造と屯倉(三二)

(二) 大化改新……………三三

東国に始まる新体制(三三) 白村江の敗戦と防人(三六)

(三) 律令制下の相武 二九

中央支配の体制(三六) 中央に集中する官道(三〇) 相模の古代物産(三三) 文化の伝播(三五)

三 中世の夜明け

(一) 僞馬と騎馬の風土 三九

僞馬の党(三五) 内乱と相武(四〇) 平忠常の乱と相武(四三) 荘園と武士(四四) 公領と武士(四七) 源義朝父子の相武経営(四九)
京洛に戦う相武の武士(五〇)

中世

一 武家の府鎌倉

(一) 鎌倉殿の誕生 三三

頼朝鎌倉に入る(五三) 鎌倉幕府の成立(五五) 鎌倉街道の整備(五六) 鎌倉の町造り(五九)

(二) 栄える鎌倉文化 三六

京下りの文化(六三) 仏教文化(六四)

(三) 相模に消え去る武士たち 三九

相模武士の風土(六九) 相模に消え去る武士たち(七三)

二 戦乱の世

(一) 鎌倉府の成立 三六

足利尊氏鎌倉に叛す(七〇) 足利直義鎌倉に死す(七三) 鎌倉府の成立(八〇) 関東公方の武断的支配と管領上杉氏(八二)
関東公方將軍と水火の対決(八三) 公方も管領も鎌倉を去る(八五)

(二) 小田原北条氏の興亡……………八七

伊勢宗瑞小田原城を攻略(六七) 小田原北条氏東国に覇を制す(六七) 小田原北条氏の民政(九二) 小田原衆所領役帳(九三)

離合常なき相甲越駈(九五) 小田原北条氏亡びる(九六)

近世

一 幕藩体制下の相武

(一) 江戸に幕府がひらかれる……………九

戦乱治まる(九五) 徳川家康江戸入城と相武(一〇〇) 家臣団の配置と直轄領(一〇二) 農村の再編成(一〇三) 交通路と関所が整備される(一〇四)

(二) 小田原藩の推移……………一〇九

藩主の交替(一〇九) 諸藩領の成立と小藩の創立(一一三) 増加する旗本領(一二五)

(三) 幕藩体制下の村方と町方……………一三〇

法人化した村(二二〇) 新田村の造成(二三) 町場・宿場・市場(二四) 村方・町方の文化(二三七) 社寺参詣と庶民信仰(二四〇)

(四) 幕藩体制の破綻……………一三三

周期的に襲う地震と天災(二三) 封建財政の破綻(二三六)

近代

一 近代化の足音

(一) 開国の舞台……………一四

海防問題に苦しめられる(二四二) 日米和親条約は横浜で締結(二四三) 神奈川奉行と居留地(二四六)

- (二) 神奈川県の成立 一七
- 貿易繁昌の裏側(二四七) 幕府倒壊と相武の旗本たち(二五〇) 他県に先立つ区会と県会(二五四)
- (三) 文明開化の窓 ミナト横浜 一五六
- 横浜に外国人が増える(二五二) 文明開化横浜に上陸(二五三) 居留地からの文明(二六二) キリスト教伝道の基地(二六三)
- 県下にひろがる開化の風物詩(二六五)
- (四) 自由民権運動の高潮 一六六
- 国会開設運動と民権結社(二六六) 政党への参加(二七〇) 松方デフレ下の農村不況(二七三) 武相困民党の挫折(二七五)
- 豪農層の地租軽減運動(二七六)
- (五) 明治憲法下の県勢 一八〇
- 国会始まる(二八〇) 神奈川県民党の分裂(二八三) 日清日露戦争と県民(二八三) 戦後の変貌(二八四) ストは海軍工廠から(二八六)
- 準則組合と労働組合(二八八) 労働争議が盛んに起こる(二九〇)
- (六) 貿易の王者横浜の成立 一九一
- 条約改正と神奈川県(二九二) 貿易関連工業が盛んになる(二九七) 世界にのびる横浜航路(二九九) 多くの銀行ができる(三〇〇)
- 湘南再びよみがえる(三〇三)
- (七) 日露戦後の人々 二〇六
- 戦勝につづくスト流行の年(三〇六) 地方改良計画(三〇九)
- 二 大正デモクラシーの波
- (一) デモクラシーと県勢 二二一

目次

打ちよせる新しい波(三二)	第一次大戦と成金(三七)	トップ成金は船舶業者(三八)	内陸工業も活況を呈す(三三)	三二								
(二) 重工業地帯の造成	重工業地帯出現の素因(三三)	海岸埋立てによる造成(三五)	鉄道が地域開発を促進する(三七)	労働争議と米騒動(三三)	最初のメーデー(三三)	県民を襲う大地震(三五)	三四					
三 太平洋戦争への道	(一) 中国侵略の拡大	昭和恐慌の旋風(三三)	工業地帯の再編成(四二)	再建労組は拡大し争議がふえる(四三)	消されるデモクラシー(四六)	無謀な太平洋戦争(四七)	三六					
現代	一 更生日本と神奈川県	(一) 占領下の県勢	占領軍横浜に入る(三五)	米軍基地化する県域(三五)	民主化への脱皮(五五)	再生する政党と労組(五五)	三五					
	二 不死鳥神奈川県の再生	(一) 成功する高度経済成長	戦時耐乏と戦後窮乏(五七)	工業生産が再開される(六二)	経済大国への再生	ドッジ不況を吹きとばす朝鮮戦争(六五)	新工業地帯の造成(六六)	神武景気からいざなぎ景気へ(六九)	再び王者横浜貿易(七〇)	経済大国再生の奇跡(七二)	現代本県の課題(七三)	三六

年表

あとがき

口絵

アメリカ資源探査衛星アーツ一号から撮影の神奈川県

(神奈川県新聞社提供)

三殿台遺跡(横浜市三殿台考古館提供)

納税木簡(県埋蔵文化財センター蔵)

阿弥陀如来坐像(高德院蔵)

青磁壺(称名寺蔵)

永享六年足利持氏血書願文(鶴岡八幡宮蔵)

明暦以前東海道小田原城下町の図(三宝院蔵)

神仏御影降臨之景況図(堀内久勇氏蔵)

四季農耕図(横浜開港資料館蔵)

安政元年ベリー提督横浜上陸の図(児玉幸多氏蔵)

米国官吏江府行装の図(ビーボディー博物館蔵)

明治十六年ころの横須賀造船所(県立文化資料館蔵)

御開港横浜大絵図(県立博物館蔵)

横浜海岸鉄道蒸気車図(県立博物館蔵)

海水浴客でにぎわう大磯海岸(大磯町役場蔵)

関東大震災で焦土と化した横浜市街(『大震災写真画報』から)

戦災の焼跡を片づける横浜市民(『マッカーサーの見た焼跡』から)

重化学工業地帯の工場群

酒匂溪谷にかかる東名高速道路

都市化が進む相模野台地(神奈川県新聞社提供)

一大臨海工業地帯へと成長した埋立地(神奈川県新聞社提供)

装幀 原 弘

(裏表紙・遊び紙のマークは県章)

はじめに

現在の神奈川県は、南に相模湾、東に東京湾をひかえ、北は多摩川を境として東京都に接し、西は丹沢山地・箱根山塊を擁して、山梨・静岡両県につづき、面積はおよそ二千四百平方キロメートルで、全国総面積の〇・六二二パーセントを占めている。

神奈川県の創立は、明治元年（一八六八）のことであるが、現在の県域が確定したのは、一八九三（明治二十六年）のことで、その広さから言えば、狭少なこと全国府県の下位から第五位であるが、人口は、一九八〇年（昭和五十五年）、六百九十二万四千二百五十八人を数え、全国府県中の上位第三位にある。同年の県民所得は、十三兆三千六百二十億円に及び、全国府県中高位を占める。

本県は、こうした県下の状況の歴史的過程を明らかにするため、県政百年を迎えたのを機会に、一九六七年（昭和四十二年）「神奈川県史」の編纂に着手し、一九八三年（昭和五十八年）資料編二十一巻二十三冊、通史編七巻、別編三巻、各論編五巻、総計三十六巻三十八冊を完成した。

資料編は、県史叙述の典拠となる県の内外に遺存する古文書・古記録等を網羅した。それによって叙述したのが通史編であり、この両者は県史の根幹をなすものである。各論編・別編は、通史編を補完するため、県下の自

然・民俗・人物等を解明したものである。県史全巻は凡そ三万七千ページ、通史編だけでも、七千ページに及ぶ。通史編は、本県の歴史について、詳細な記述を行っているが、これを通読するのは、容易でない。よってここに、取り敢えず通史の概要を、人々の活動に視点を置いてまとめたのが本書である。

この龐大な県史の編纂は、県当局の熱意と、県史編集室員の万般に渉る努力と、県下各地の方々の援助に支えられて、多数の編集委員及び、委員の外に依頼した研究者の執筆分担によって出来たものであるが、この「神奈川県史」は、県史の前主任執筆委員児玉幸多・大久保利謙・安藤良雄の各氏協力の下に、竹内理三が通史編七巻のダイジェスト版として、単独執筆したものである。

本書によって、本県県民の活動とその発展の概要を知った読者は、さらに通史編によってその詳細を知り、より深く研究しようとする場合、あるいは本書に触れ得なかつた事柄についても知られたい場合などには、資料編を参照されることをおすすめる次第である。

原始・古代

一 人間の痕跡

(一) 最古の人跡

二万年前の人跡

日本列島における人間の歴史は、十万を単位として数えるほどの遠い年代にまで、さかのぼる可能性があるといわれている。

しかし今日のところでは、三万年から一万年前に出来たと推定されている立川ローム層とよばれる地層の中から発見される石器が、最古の人間の痕跡であるとされている。この立川ローム層は、五十万年前から四十五万年前とされている洪積世の中ごろ以降に、南関東では箱根山や富士山、北関東では白根山・浅間山等の火山活動で噴出した火山灰が、偏西風によって運ばれ、堆積^{たみせ}してできた地層（これを関東ローム層とよんでいる）のうち、最後にできた地層である。

この地層から発見される人跡は、石器の存在によって確認される。この時代は土器がないので、先土器時代とか無土器時代と呼ばれるが、考古学上の時代区分である旧石器時代と呼ぶ人もいる。

1 人間の痕跡
この先土器時代の存在は、一九四九年（昭和二十四）に、相沢忠洋^{たけひろ}の岩宿遺跡（群馬県）の発見によって初めて知



ローム層断面 相模原市丁五号遺跡

られた。そののち、この先土器時代の遺跡の発見が相ついで報告され、今日では、北は北海道から南は沖縄まで、その遺跡の数は、ほぼ五千を超えるに至った。ただ、その分布は、全国的であるとはいえず、地域的な偏在が目立っている。

現在、県下では、約二百か所ほどの先土器時代の遺跡が報告されている。その八割以上が、相模原市・座間市・大和市・海老名市・綾瀬市・藤沢市にまたがる相模野台地にある。しかし台地の中央部にはなくて、台地の東を限る境川と、西を流れる相模川の両川が台地をきざんでいる多数の谷にのぞんで存在している。その状況は、全国的にみても、分布密度の最も高い地域のひとつとなっている。また、目黒川・引地川・蓼川・綾瀬川・目久尻川・姥川・鳩川の流域にも、点々と遺跡が並んでいて、人々が、川に沿って移動していたことを示し、その生活が、川にたよること